

重症心身障害児・者病棟における骨折事例調査

木下智永子¹⁾ 樽谷八千代¹⁾ 矢久間みゆき¹⁾ 濱口靖子¹⁾
澤田典子¹⁾ 田中洋子¹⁾ 尾方三月¹⁾*

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 5 病棟

A case survey on fractures occurring in children (persons) with severe mental and physical disabilities

Chieko Kinoshita¹⁾, Yachiyo Tarutani¹⁾, Miyuki Yakuma¹⁾, Yasuko Hamaguchi¹⁾,
Noriko Sawada¹⁾, Yoko Tanaka¹⁾, Yayoi Ogata¹⁾*

1) The 5th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

*Correspondence: byoutou5@tottori-iryu.hosp.go.jp

要旨

(はじめに) 重症心身障害児・者は、様々な原因から骨折しやすい。A 病院の重症心身障害児・者病棟)でも年間数例の骨折が起こっている。それらの現状把握を行うために事例調査を行った。(結果) 1. 発生部位は大腿骨で、寝たきりの患者が多い。2. 受傷機転不明の骨折事例が多い。3. 87%は看護師が発見している。(考察) 痛みを訴えられない患者が多く、受傷機転がはっきりしないため、看護ケア時の細やかな観察が大切になってくる。(おわりに) 日常的に私達が行っているオムツ交換・更衣・体位変換・移動の介助・入浴などの看護ケアの場面で安全に対する配慮を充分にしていかななくてはならない。鳥取臨床科学 2(1), 20-25, 2009

Abstract

Introduction: In children (persons) with severe mental and physical disabilities, several factors are causatively involved in bone fractures. Several cases of such fractures in the wards of children (persons) with severe mental and physical disabilities in Hospital A have been reported annually. We conducted a case survey on such fractures in these wards, focusing on: (i) predilection sites; (ii) causes; and (iii) discoverers. **Results:** (i) The most afflicted site was the femur. All patients who had had fractures in the femora subsequently became bedridden; (ii) The causes of most of the cases surveyed were unknown; (iii) 87% of patients with fractures were discovered by nurses. **Discussion:** Nurses are required to carefully and precisely observe children (persons) with severe mental and physical disabilities, in their daily nursing and to care for them because patients cannot complain about pain or explain how their fractures occurred. **Conclusion:** It is necessary for nurses to show careful and committed consideration of the safety of patients in daily nursing and care, including diaper changes, dressing, postural changes, and transfer and bathing assistance. *Tottori J. Clin. Res.* 2(1), 20-25, 2009

Key Words: 重症心身障害児・者, 大腿骨骨折, 受傷機転, 寝たきり; children (persons) with severe

I. はじめに

重症心身障害児・者は、健常者と違い運動量が少なく、幼少時からの骨の形成不全があり骨塩量も低いと、常に骨折の危険性を伴う。山口¹⁾は「抗痙攣剤の一部（フェノバル系、プリミドン、アセタゾラミドなど）はCa代謝に関与するといわれているので、長期服用者はとりわけ注意しなければならない」、上田²⁾は「基本的に立位歩行不能で動きが少なければ少ないほど、骨粗鬆症は強く、常に骨折の危険性をはらむ。骨萎縮への影響は内分泌的なものより廃用性の影響が大きいと言われている」と述べている。そのため、重症心身障害児・者の看護を行う際に安全に注意しながら行うことは当然である。看護師は骨折しやすいと認識しているにも拘わらず年間数例の骨折は後を絶たず、B病棟でも原因不明の骨折事例がある。

そこで、A病院での重症心身障害児・者病棟において、過去5年間（カルテ保存期間）に亘り、どのような骨折の事故報告があったのかデータを集計・分析し、今後の事故防止へとつなげていけるよう骨折の発生状況を調査した。調査した結果について以下に報告する。

II. 研究目的

今後の事故防止につなげていくため、重症心身障害児・者病棟での骨折の発生状況を知る。

III. 研究方法

1. 研究期間：平成20年7月1日～9月30日。
2. 研究対象：A病院の重症心身障害児・者病棟である4個病棟を対象とする。対象とする患者総数は160名で、5年間（調査年は平成15年度から平成19年度の過去5年間）の調査のための延人数は800名である。
3. 研究方法
 - 1) 骨折データ収集用紙（図1）を作成する。小児科の医師、当該4個病棟へ研究依頼書を提出する。

- 2) 事故報告書より、骨折に関する事例を調べる。
- 3) 当該病棟へ出向き、把握した骨折事例の情報を、カルテの記録と各病棟スタッフからの聞き取りにより得て、骨折データ収集用紙に記載する。
- 4) 収集したデータを基に分析を行う。

4. 倫理的配慮

この研究で使用するデータは、骨折の事例調査を目的としており、本看護研究以外には使用しない。対象患者のプライバシーは保護され、不利益を与えない。氏名・年齢をふせ、個人の特長が出来ないよう配慮した。また、倫理委員会により承認されている。

IV. 結果

方法で述べたように調査した結果を表1にまとめた。過去5年間で起こった骨折事例は計14例であった。性別では男性9名、女性5名であった。年齢は、10歳未満から60歳代まで広い年齢層でみられた。活動レベルは、歩行可能な患者が2名、四這い可能な患者が2名、残りの10名は寝たきりであった。抗痙攣剤内服の患者は12名であった。

骨折部位（図2）は、大腿骨部が5例、手指が3例・足趾が3例、上腕骨、脛骨、橈骨部が各1例であった。骨折部位は、大腿骨骨折が一番多かった。骨折原因（図3）は、痙攣発作での転倒が1例、看護師による上体挙上時が1例、訪問学級の先生による車椅子移動時が1例で、骨折の原因が分かっている事例は3例であった。残り11例が原因不明であった。発見者（図4）は、看護師が12例、その他が2例であった。看護師による発見状況は様々であるが、処置・ケア時に発赤、腫脹などで発見されていることが多かった。その他は、他患者が発見した事例で「痛そうだから、診てあげて」との訴えにて発見された例と、退院時に母親が更衣をしている中で発見された例の2例であった。